

なぜコンゴに腕のない人々がいるのか

～恵まれすぎた国、一人の男の強欲さが齎した残酷な結果、今も続く紛争～

国際文化学部 国際文化学科 1年
学籍番号

はじめに

大学の講義でコンゴ民主共和国に腕のない子どもがいっぱいいるのは有名な話だと聞いた。ルワンダの大虐殺についての映画を見たこともあり、隣国であるコンゴの紛争や現状に興味を持った。そこでなぜそのようなことが起こっているのか、それには自分が生まれた翌年から現在もずっと続いているコンゴ紛争と関係があるのではないかという考えを持った。そのことが起きた原因を明らかにして、その問題や紛争、平和についてもっと深く考えたい。

1. コンゴ民主共和国

アフリカにあるコンゴ民主共和国（旧ザイール）は豊かな資源に恵まれている。恵まれすぎてしまったことで、紛争は私が生まれた翌年から現在までずっと続いてしまっている。資源に恵まれているにも関わらず、世界最貧国のひとつであるコンゴ民主共和国。そんなコンゴでは腕のない子どもが大勢いるのはなぜだろうか。この恵まれた豊かな資源があるコンゴの地で、いや、恵まれてしまったから起きてしまったことなのだと分かった。

2. コンゴ“自由国”

まず腕がない子どもが大勢いるのは、生まれつきだとか病気だからということが原因ではない。人間によって切り落とされたから無いのだ。まずそれが起こった時は100年前のコンゴ民主共和国が“コンゴ自由国”という国名だった時に遡ることになる。その時コンゴは、ベルギー国王であったレオポルド2世によって私有植民地化されていた。当時、小国であったベルギーを治めるだけでは物足りなかったレオポルド2世は、父親の跡を継いで海外植民地の物色を続け、ヨーロッパの植民地化になっていなかった資源に富むコンゴを見つけ、コンゴ河流域が特に資源に富んでいたため、そこでレオポルド2世は容赦のない資源搾取を始めた。そしてその当時1887年の空気入りゴムタイヤが発明されたことがきっかけとなり、あらゆる種類のゴム製品の需要が世界中で爆発的に増大し、1890年代には原料ゴムの世界的不足が慢性化、価格は上昇の一途をたどる。それはコンゴに野

生のゴムの際限ない搾取と大虐殺を生んだ。象牙やゴム原料などの資源の回収方法は過酷すぎる強制奴隷労働をさせることによって成り立っていた。そのあまりに過酷な強制労働に耐え切れず、作業を捨て逃げようとする者が大勢いた。それを防ぐためにレオポルド2世は公安軍を作り、黒人労働者の逃亡をその家族を人質に取るという残忍極まりない方法で防ぎ、力尽きるまで働かせ使い捨てにし、コンゴ河流域で無数の先住民たちは死んでいった。公安軍は銃火器を使用しており、黒人隊員による銃弾の窃盗があり白人支配者は反乱を恐れていた。小銃類は先住民の首長の間にも普及していき、銃弾の需要は大きく闇取引の誘惑が強かった。それを厳しく取り締まるために白人支配者は、銃弾が無駄なく人間射殺のために用いられた証拠として、消費された銃弾の数に見合う死人の右手首の提出を黒人隊員に求めた。そこから銃を使わず人を殺しその手首を切り取って提出し、銃弾をせしめ売るのが現れた。また、わざわざ殺さなくても過労、病気、飢餓から人々は死んでいった。生きたまま右手首を切り落とされる者も大勢いた。他にも、強制労働から逃げようとする者や、資源回収のノルマに達しない者やその人質となった家族にも腕を切断するという残虐な行為が行われていたということがわかった。だから腕のない人々が大勢いたことになる。

腕のない子どもたちが大勢ということは、大人でも逃げたくなるほどの過酷なノルマを子どもは達することが難しかった、あるいは強制労働者の人質となるのは夫にとって大事な妻や子どもにあたることなどから多かったことも一つの原因であると推測できる。

これらをふまえると、約100年前のコンゴに腕のない子どもたちや人々が大勢いた原因はレオポルド2世によるコンゴの私有植民地化と容赦のない資源搾取、人の欲望が齎した人間による切断となる。

(藤永茂：『闇の奥』の奥—コンラッド・植民地主義・アフリカの重荷』より)

3. 現在のコンゴとその隣国の現状

現在でも手を切断されている子どもたちはいると聞いたが、コンゴ民主共和国での詳細な現状に関しては、インターネットのコンゴに関する情報を日本語や英語から検索してニュースやブログなどをあたってみたり、今現在のコンゴに関する情報が書いてある文献を探したりしたが無く

有力な情報が手に入らなかった。しかし、手足切断されている子どもたちは、隣国であるルワンダや、シエラレオネではかなり多く報告されている。西アフリカのシエラレオネではダイヤモンドで有名で、1991年にはダイヤ利権を狙う反政府勢力が武装蜂起し、政府軍との間で大規模な戦闘が10年以上も続いて無政府状態が続いてきた。その内戦で最も残酷な形で少年兵が使われていた。反政府勢力は反抗するものの手足をナタで容赦なく切断するなどして殺害。反政府軍が無差別に行ったこの「手足切断作戦」が最近のアフリカの内戦に関して最もむごたらしいという情報が手に入った。その理由が、殺害するよりも手足を切断したほうが、被害者の世話をするのに人手が必要で敵（政府側）の負担が増し、恐

怖心も持続するという狙いがあったからだという。この残虐な行為は、組織的に行われ、部隊によって片腕、片足、両腕など切断する部位が決まっていた、それによって「半袖（肘から上を切る）」小隊、「長袖（肩から下を切る）」小隊などと呼ばれていた。1998年以降、手足を切断された子どもは、人権団体が確認しただけでも1800人に及び、これ以外に約1万人の子どもが殺されたと推定されている。（戦場で戦う子供たち：地球環境報告/それから～石 弘之からの報告～より）英文の記事を調べたところ、確かに、2003年の東部のコンゴの村でも紛争の時にナタで腕を切り落とされている小さい子どもやお年寄りの方、女性もいて多くの方が殺されたと書いてあった。このことから、現在でも腕を切られている人々は存在するということが考えられる。

おわりに

以上のことから過去にも現在にも植民地化や紛争によって、腕を切られて無い人々はたくさんいるということが明らかになった。かつてコンゴに腕がない人々がいた原因は、一人の男の強欲さが齎した資源搾取のための強制労働下での罰や、銃弾を無駄に使用しない証明に右手首が必要となったことにある。そして現在もそのようなことは行われていると聞いたが、多く報告されているのはシエラレオネや隣国のルワンダであった。現在のコンゴ民主共和国での手の切断に関する詳細な情報は手に入らなかったが、2003年に東部のコンゴの村でナタを使って腕を切り落とされた人々はいるという事実がわかり、未だ悲惨な紛争が行われていて、手の切断に限らずもっと残虐な行為が日常的に行われているということが分かった。そして現在の腕の切断の有無に関する事実を詳しく述べられている情報が日本語では殆ど無いことから、日本でいかにコンゴ民主共和国の手足切断に関する現状について詳細に知っている人が殆どいないということが明らかとなった。日本は鉱物資源が豊富であるコンゴから携帯電話やスマートフォンの材料である希少金属：レアメタルを輸入していて、切っても切れない関係の国であるにもかかわらず、コンゴ民主共和国について認知している人すらあまりにも少ないということも分かった。調べる前は筆者もその一人だった。現状については詳しくわかることができなかったが、未だ続く紛争によりいくつかの武装勢力のグループたちから手足切断以上に非人間的で残虐な行為を受けて今もお苦しんでいるコンゴの人々はとても多い。身体の切断も今現在でも起きているということが明らかになっただけでも、アフリカ、そしてコンゴ民主共和国に対する筆者の意識や認識は変わった。コンゴやその他の地域での紛争や内戦がなくなる限りは、このように腕や足などを切られる人々は絶えないだろう。特にコンゴ民主共和国の紛争の原因は資源に恵まれているゆえ、その利権をめぐる紛争が起きてしまっている。隣国であるルワンダを始めとする他国もその利権を争い複雑に絡んでいるのでなかなか解決することが難しいのが現状だ。コンゴ民主共和国の現状を知らない人々はたくさんいるだろう。知られず、また関心を持たれないことは、人道援助の欠如を引き起こしている。知られて、関心を持たれることで民間組織や政府、国際機関が動き、紛争解決への道が切り開かれる

のではないだろうか。

【参考文献】

- ・米川正子 (2010) 『世界最悪の紛争「コンゴ」：平和以外に何でもある国』 創成社
- ・草場安子 (2002) 『コンゴという国』 明石書店
- ・藤永茂 (2009) 『『闇の奥』の奥ーコンラッド・植民地主義・アフリカの重荷』 三交社
- ・土井 香苗 10/06/15 第 13 回 世界最悪の犠牲者を出しているコンゴ民主共和国
<http://kaze.shinshomap.info/series/rights/13.html>
- ・戦場で戦う子供たち：地球環境報告/それから～石 弘之からの報告～
<http://s.ameblo.jp/ishihiroyuki/entry-10003351045.html>
- ・Tale of a child soldier in Congo World The Guardian
<http://www.theguardian.com/world/2009/jan/28/congo-human-rights>
- ・一般財団法人 アジア・太平洋人権情報センター
<http://www.hurights.or.jp/archives/newsletter/section3/2009/07/post-62.html>